山の呼びごえ

阿蘇……大阿蘇
どつしりと座をかまえた量感の起伏
辿りおり遥かからがる無限のカーブ
無気味な静寂と凄まじい鳴動

そして
しんしんと深い青空のもと
枯草の中には竜胆が咲き
灌木を縫うて頬白が飛ぶ

この不思議な大自然の調和に
人々はただ卑小感に打ちのめされる
阿蘇……大阿蘇
（写真は小国地方の林相）

林業　ハゲ山をみどりに

年産四億を2倍へ

畜産とともに林産は阿蘇産業の双へき、といわれる。四万五千町歩という広大な原野は、この二つの産業にとつて、洋々たる希望の舞台であり、この二人の立役者によつて、適当に分割利用さるべき運命をもつているともいえよう。

現在、阿蘇の森林は総額一、三〇〇万石の材積をもつていて年間四十万石が伐採される。

これに年産四万貫の椎茸や木炭などの副産物を加えると、総額約十億円の収入をもたらしているが、計画建設によると、昭和四十年の最終段階まで、毎年二、五〇〇町歩の造林を行つて総面積四二、〇〇町歩に達せしめる計画で、現に今年も県行、一般、水源の各造林が約五〇％進んでいる。

この計画によると、三十年後には年間一〇〇万石の伐採が予想され椎茸の八万貫その他の収入と合せて二〇億円、即ち現在の倍額がころがり込む計算になる。

ノーモア・六・二六

六・二六大水害は、阿蘇山塊がその元兇だといわれる。この地域にもつと造林が行きわたつていたら洪水はある程度防ぎとめられたに違いない、この反省が阿蘇の造林に大きな拍車[illegible]けたことはうたがえないところだ。

計画建設では、昭和四十年までに、渓間工事二十億、山腹工事四億、計二十四億円を投じて土砂の流失を防ぎ、山脚を固定するための堰堤を設ける。従来は浸蝕防止の堰堤だけだつたのに一昨年から山腹工事を始めたのは[illegible]・二六の貴重な経験に基く新しいプランである。

一方植林によつて雨水の保有調節をやり、下流へ一度に押流さないというのが一つの方法、この二つがタイアップしてノーモア六・二六という体勢をかためるわけだ。

この体勢に応じるための苗木の生産も今では年間七〇〇万本に達し、郡内の需要を満たした上に遠く四国中国までも供給され、その優秀性が確認されるに至つた。

こうした悩みもある

こう見てくるとよいことずくめのようだが県事務所の当局に聞くと、いろ〳〵悩みもある。

第一には従来全国で一八、〇〇〇町歩も行われた官行造林が、三十二年から六、〇〇〇町歩に減らされた、とばつちりを食つて、郡でも従来の七三〇町歩が一きよ二二〇町歩に激減したこと、第二には杉の害虫スギコガネ虫が法定害虫に入つていないため、現在枯死にひんした場所もあるのに駆除が十分出来ないこと、これらは政府向けの要望事項になるわけだが、地元に対しては、火入れ（野やき）が依然として行われ、森林火災の原因になりがちなこと、植林がほとんど杉一点ばりであることなどに改善の余地があるといわれる。

うち火入れについては、牧野の開墾利用によつて牧草を残さないように努め、植林については南郷檜の奨励によつてその欠陥を補うように指導を進めてをり、逐次実績をあげつゝあるようだ。

ジュエット〝希望への序曲〟

阿蘇・天草

現地ルポ

有史以来二千年の風化を経た阿蘇は、その蒼古な歴史はともあれ、世界第一にランクされる火山としての観光価値をもつて今や国際的に照明を強めつゝある。

だがその広大な原野をふくむ産業阿蘇の経済価値は、久しく関心の外におかれた。

戦後、産振計画、総合開発、計画建設等一連のプランによる開発のメスが加えられるに至つて、後進性の分厚い表皮は、年とともに切りひらかれ、脈々たる血管に注入された近代化の生気は、産業阿蘇に新しいスタートを切らせた。

『ゝに過去十年の歩みをふり返つて、その足場をたしかめ、更に新しく迎えた昭和三十三年へ大きなステツプをふみ出そうとする現地の様相をたずねて、このルポルタージユの一章をおくる。